

郡上八幡

溪流釣りでは全国にその名前が知れている郡上八幡を、この冬に訪れた。かつてはアマゴや鮎を、自分の腕一本で釣り上げ生活していた職業漁師が何人も住んでいたという郡上八幡。郡上釣りのふるさとである。

郡上釣りは溪流というよりも、本流における数釣りの必要から生み出された抜き釣りの事である。谷の溪流魚と違い、餌が豊富で流れの複雑な本流域の釣りは、魚があばれると場荒れを起こして釣りにならない。

重い流れの中から、瞬時に魚を抜きあげる力を持つ郡上竿。独特の角度の付いた郡上タモは、腰に差して使用し抜きあげた魚を放り込む。すぐに餌を付け、仕掛けを振り込む。

ポイントで一通りの魚が釣れると、タモから魚を魚籠に移し釣り場を移動する。魚籠は郡上魚籠。逆三角形の形をした魚籠は鮮度を落とさず、量の入るこの魚籠は本来は職業漁師が使う魚籠である。

名古屋から郡上八幡へ向かうには、長良川に平行した道を上流へ遡っていく。美並（みなみ）を過ぎて長良川に大きな支流が流れ込む。この支流が吉田川で郡上八幡はこの合流点付近に作られた町である。

郡上八幡は、町のいたるところに湧水がわき出ている水の町だ。用水路が張り巡らされ、日常の生活の中に流れがあり水の音が聞こえる。町の中を流れる吉田川には、沢山の魚が泳いでいる。

半分は観光客向けの趣向なのだろうが、ある用水には岩魚やサツキマスそして鯉などが沢山泳いでいる。人の手で放されたとはいえ町中の用水に魚が生息出来るのは素晴らしいことだと思う。



郡上八幡を流れる清流吉田川

郡上魚籠

郡上釣りでは、郡上地方独特の釣り道具がある。その頭に”郡上”という名称を付けているのも、道具への愛着と誇りがあるからなのだろう。その中の一つに、郡上魚籠と呼ばれる竹製の魚籠（びく）がある。

普通の釣具店で売られている魚籠との最大の違いが、その形にある。逆三角形型と言えれば良いのだろうか。底が三角屋根を逆さまにした形をしているのが、特徴である。

郡上釣りでは、釣れた魚の腹は抜かない。姿形が悪くなるのと、商売人は魚の重さで取引されている為に腹を抜いてしまう様なことはしない。反面、アマゴなどの溪流魚は非常に痛みが早い魚である。

腹を抜かないで鮮度を保ち、しかも商売人（職業漁師）の使用に耐えられる強度と容量が必要になる。この相反する要求を具体化したのが郡上魚籠である。

底が一番細くなっている郡上魚籠は、釣れた魚を腹を下にして逆ピラミッドの様に積み重ねて収納する。このため魚籠の中で魚が動くような事がなく、魚体に加わる力が分散され鮮度を保つ。

魚籠の片面に背あて板が取り付けられており、魚籠を自由に移動させる事が出来るようになっている。そして板が人の体と魚籠の間に入る為、体温が伝わるのを防ぐ。そして風通しが良くなる役目を果たす。

竹も固い良質の物を使っているので、強度も想像以上に強く、足で踏んでもつぶれないと言われるほど丈夫な魚籠である。

現在、本物の郡上魚籠を作れるのは、郡上八幡に住む嶋数夫氏ただ一人だけである。後継者もなく、年に100個も作れば上等な魚籠でその製法はまさに職人にしか作れないもの。

実用品としての郡上魚籠の価値はもとより、機能美を持つ郡上魚籠は無形文化財に指定されている。かつては何人もの職業漁師が愛用していた郡上魚籠も川に魚影が少なくなり、職業漁師の数も減りつつある。

そんな職漁に愛された郡上魚籠は、郡上竿や郡上たもと並び、この川の歴史であると思うのは、僕だけだろうか。

最後の郡上魚籠職人



職人の手によって魚籠が編まれていく



使い慣れた道具で竹をさいていく



完成した郡上魚籠(正面)



完成した郡上魚籠(横面)



完成した郡上魚籠(真上)



背あて板には「三代目嶋作」の銘

嶋氏の写真は眞田健司さんの撮影した写真をご厚意により使用させて頂いております